いとし子よ

永井　隆

わがいとし子よ。

「なんじの近き者を己の如く愛すべし」

そなたたちに遺す私の言葉はこの句をもって始めたい。そしておそらく終わりもこの句をもって結ばれ、ついにはすべてがこの句にふくまれることになるであろう。

これは多くの人が聞きなれた言葉であり、そなたたちも大きくなればたびたび耳にするであろう。なぜなら、これは人の守るべき最も大きな掟であるからである。

「なんじ心を尽くし、霊を尽くし、意を尽くして主たるなんじの神を愛すべし」

というのが第一の掟であり、初めに述べたのが、その後に続く第二の掟である。すでに何千年来いい古された言葉を、わざわざ遺言として事新しげに取り上げなくともよさそうに、とあるいは思うかもしれないが、わが子よ、言葉を知っているということと、その言葉の命ずるとおり行なうということとは大きな違いがあるのである。何千年来、何千億とも数知れぬ人々がこの言葉を知っていた。しかし、この言葉のとおり行なった人はおそらく指折り数えるほどしかなかったのではあるまいか？現にこの私が、初めてこの掟の言葉を聞いたとき、眼がさめる

ばかりに心をうたれ、一生この掟を守りゆこうと心に決めたのであったが、今ふりかえりみて真に恥ずかしいばかり、掟に背き通してきたのである。

己の如く……人を愛す。

言葉はまことに易しい。しかし、いざこのとおり行なおうとすると、わが生命を棄てるところまでゆかねばならぬ場合も起こる。わが子よ、ここにこの句をあげたのは、言葉を教えたのではなく、これをそなたたちが一生のあいだ常に行なってくれるように願ってのことである。人はともすればわが欲に心を奪われ、この最も大きな掟を忘れがちなものである。それゆえ私はこの私らの住む家に如己堂と名をつけた。

わが子よ、如己堂に住む者よ。どうか家の名にふさわしい愛の一生を送っておくれよ！

――これこそ私のそなたたちに遺す言葉のすべてである。

夢をもて

いとし子よ、夢をもて！

美しい夢をもて！　夢はただ一つ、一生ひとつの夢を追え！

夢をもつ人生は楽しい。夢を追う人生は日々に新しい。

コロンブスは夕焼けにそまる水平線を見はるかすたびに、あの波のはてにきっと美しい土地があるにちがいないと思った。大西洋を乗り越えて、その新しい楽園に渡ろうという夢が、ついにアメリカ大陸の発見となった。

大空を飛びたい、トビのように悠々と晴れた空を飛びまわったら、どんなに愉快だろう。なんとかして空を飛ぶ工夫をしたいものだ。ライト兄弟はいつも空を飛ぶ気持ちよさを夢に思って苦心を重ね、ついに飛行機を発明した。このごろの子供は飛行機で空を飛ぶことは、下駄をはいて道を歩くのと同じく、あたりまえのことだと思っているから、爆音が頭の上を過ぎても、ふり仰ぎもしないが、むかし飛行機というものが初めて姿を見せたときの騒ぎといったら、大したものだったよ。

私はそのころ中学生だった。ちょうど学期試験の最中だった。新聞には何日も前から大きな見出しで、飛行機が市の空を通ることが書き立てられていたので、その日に雨など降らなきゃいいがと、まるで日食のときのようにみんな心配していたものだ。雨が降ったり、少し風が強かったりすると、飛行機は飛べなかったのだからね。いよいよその日は来た。よく晴れて風もなく、市民はみんな安心した。

中学校では朝礼のときに校長先生が、生徒に向かって、たとい飛行機が来ても、中学生の本分を守り、騒いで校庭へ飛び出したりなどしてはいけない、飛行士が空から見て、あの中学は規律が乱れていると思うから、と訓示した。

第三時間目が始まって十五分もたっていたろうか、生徒が試験の答案を真剣に書いている最中だった。中学校はひっそりしていた。突然窓の外の空がガーッとうなった。――ソラ来たゾ！ワーッと教室は総立ちだ。規律も何もあったものではない。監督をしていた先生の姿が真っ先に教室を飛び出していた。生徒は白い答案用紙を机の上に放ったまま、大声を上げて校庭へ飛び出した。

飛んでいた、飛んでいた、青空を、茶色に塗った複葉機が――。

私はあのときの感激を何十年かたった今でも、まざまざと胸の中に呼びかえすことができる。ああそのとき、校長自身が高い段の上に上がっていて、両手を振りながら、アアア、アアアと叫んでいた。

（中略）

むかしから、いろいろの人がそれぞれの夢をもった。その夢がみな実現されたわけではない。ただ大きな夢をぼんやり抱いているだけで、その実現のために一途に工夫を積み重ねないで過ごした人は、結局なんにもならなかった。

また夢を実現するために努力をしたといっても、途中であれこれと気が変わり、あれをやりかけては止め、これに手を出してはまた投げた人も、結局ものにならなかった。

いとし子よ。人の一生は短いようで長く、また長いようで短いものだ。多くの人に共に喜んでもらうほどの大きな夢は一人に一つしか実現されない。「種なし西瓜を作る」という夢が実現するのには、一人の学者の一生が費やされた。

わが子よ、もつ夢はただ一つ。その一つの夢を追うて一生を終わるのだ。わき目もふらず、足ぶみせず、一途に前へ前へと進んでゆけ！

一生にただ一つの夢。――その夢が小さければ、そなたの一生の収穫は小さい。その夢がみにくければ、そなたの一生もみにくく彩られるであろう。

それゆえ、もつべき夢は美しくなければならぬ、大きくなければならぬ、高くなければならぬ、正しくなければならぬ、新しくなければならぬ。

そして忘れてはならぬ点は、決して己ひとりの利益をねらう夢であってはならぬということ

だ。すべての人が、世界中の人が、今地球の上に生きている人類だけでなく、その子孫に至るまで、共に喜んでくれるような夢でなければならぬ。人類こぞって喜んでくれるようなことであれば必ず神もお喜びになる。そうだ、もつべき夢は神のみ旨にかなうものでなければならない。

永井隆『いとし子よ』（サンパウロ）より

如己堂

長崎市名誉市民、永井隆医学博士の病室兼書斎。

島根県出身の永井博士は、長崎医科大学卒業後、放射線医学を専攻した。当時は結核患者が多く、医療機器も不十分だったことから、放射線を過量に受け、「慢性骨髄性白血病、余命三年」と宣告された。その二か月後、原爆を被爆し大けがを負って、妻までも失ったが、被災者の救護活動に積極的に取り組み、ついには寝たきりとなってしまった。

しかし、科学者としての不屈の研究心とカトリック信徒としての厚い信仰心もあって、病床にありながら十数冊もの著書を執筆した。

博士は、この建物を「己の如く隣人を愛せよ」との意味から『如己堂』と名づけ、ここで二人の子どもと生活した。そして、ここから世界中の人々に戦争の愚かさと平和の尊さを発信し続け、昭和二十六年五月一日四十三歳で永眠した。

博士の恒久平和と隣人愛の精神は、今も多くの人に受け継がれており、如己堂はその象徴となっている。